

これが浦幌町開拓獅子舞の起源である。当時の獅子舞は、獅子頭は「ザル」を利用し、目、鼻は「イモ」あるいは墨で書き、耳は「カボチャ」で形を作り麻で結び、胴体は南京袋を縫い合せて作り、中で踊る人は5～6人であった。

明治37年、富山県の人「空萬藏」という大工さんが、この獅子舞を見て感動し「ワタドロ」の木に獅子頭を彫刻して奉納した。この獅子頭で獅子舞も年々盛大になり祭りばかりではなく、学校の落成式やお寺、その他の特別な行事がある時は遠くまで出かけて行き祝の獅子舞をするまでになった。空萬藏氏の彫刻した獅子頭は、東山にある郷土博物館に大切に保存されている。

その後、笹川、麻生両氏が転出してから、しばらくの間下火になったが、大正7年頃から万年の森川喜助、角尾勝太郎の両氏が先生棒となり、中西与作、角尾善師、下坂与吉の各氏と共に、開拓当時をしのぐ盛大な獅子舞が昭和16年頃まで続けられた。

しかし、太平洋戦争の勃発により、兵役に服する人も多くなり、指導者であった中西、下坂、角尾の各氏も他村に転居したりして止むなく休止の状態が続いた。終戦後、赤部順壱氏の奔走によって帰町した大正時代の指導者、棒の中西与作、笛の下坂与吉、槍の森理吉、中西与蔵、森宗太郎の各氏と図り開拓当時より続く獅子舞を更に盛大なものにし、新しい町づくりに供したいと昭和21年の秋祭りに40歳～50歳のこの人達が中心となり、戦後始めての獅子舞を始めた。翌22年には、開拓当時のあらゆる苦労を秘めたこの立派な獅子舞を後世に伝承するには、若い人達の育成をしなけれ

ばならないと指導に務めた。しかし、職業上の事情もあり充分な練習が出来ず、後継者の育成には大変苦慮したようである。昭和26年頃には、浦幌中学校の希望者を集め獅子舞を続けたこともある。昭和32年、飯山耿郎氏の協力を得て、飯山鉛筆工場の従業員を動員し、万年及び住吉町の有志と共に更に伝承に努める。

60有余年の間、いろいろな苦難とたたかいながら本町在住の有志により伝承されて来た開拓獅子舞を、本町の文化芸術として保護し、末長く継承して行くことが先人の開拓の遺業を偲び更に開拓の尊い精神を後世に伝えることにもなるということで、昭和39年2月、有志により浦幌町開拓獅子舞保存会が発足し、衣装、笛、太鼓等を新調更新し、装いも新たにし益々盛大になった。

この頃より、十勝管内の祭典行事等に再々出向き浦幌町の開拓獅子舞を紹介披露している。またNHK-TVの「ふる郷の歌祭り」にも出演し全国に紹介される。

昭和40年3月には、浦幌町無形文化財第1号に指定され、今後永久に保存されるに至った。これも、開拓当時から伝承に努めて来られた先輩指導者の並々ならぬ苦労と努力があればこそである。

現在、万年を中心とする40代50代の指導者の下で20代の人達が立派に保存のため努力している。開拓獅子舞は、この様に保存会の方々の熱意ある努力により立派に保存されているが、我々町民一人一人が郷土が生んだ誇りある郷土芸能に深い感心をもち永久に受け継がれていくよう惜しみない協力をしていかなければならない。

(吉野小型映画クラブ事務局長)

## 霧止山チャシ跡について

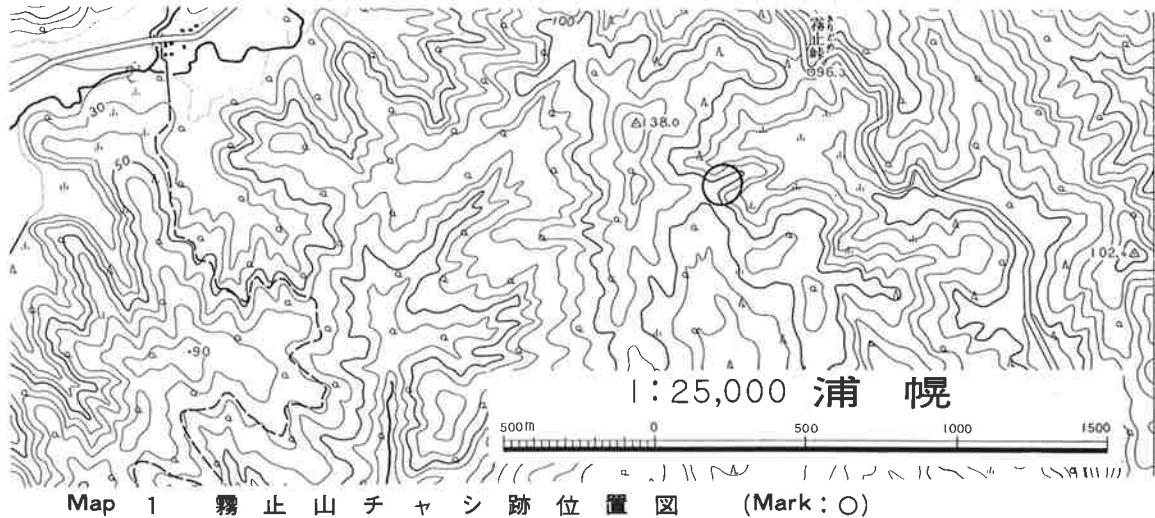
後藤秀彦<sup>\*</sup>・佐藤芳雄<sup>\*\*</sup>

I  
霧止山チャシ跡は、浦幌町字共栄と同町字直別を結ぶ旧国道38号線の霧止峠（標高96.3m）の南西約500mに所在する。行政区画上の所在地は、北海道十勝郡浦幌町字昆布刈石1番地7号である。

チャシ跡は、極めて深い山中に存し、北東方向になだらかに突出した半島状の尾根の基部に二条の直線壕を掘削しただけの単純なものである。チ

ヤシの両袖は、深い沢となって急傾斜で谷底に落ち込んでいる。標高105m。比高35m。

壕の長さは双方とも10mで、壕間は15mある。したがって、壕によって区切られた郭内の平坦部は10m×15mの長方形となっている。壕の深さは1m内外で、壕の両側にわずかに盛土が認められるが、壕掘削の際の土砂の多くは両袖の深い沢へ廃棄されたものと考えられる。



PL. 1 北西側からみた霧止山チャシ跡

この壙の断面は、北西側の山腹から遠望できるが、壙の内側の盛土のためチャシ全体はあたかも「お供山」を扁平にしたように見える。

このチャシからの眺望範囲は、チャシをとりまく山腹と沢のみであり、平野及び河川を臨むことは一切できない。この特異な眺望範囲が、このチャシの具有する機能の一端を暗示しているようである。

## II

このチャシ跡にかかる調査は、齊藤米太郎によるものが最初と思われる（齊藤、1935）。

齊藤米太郎は、このチャシ跡に近い大津村立静内小学校（現在浦幌町、1977年3月31日廃校）に勤務していた関係もあり、1934年11月17日地元の出村清氏の案内でこの地を訪れ、チャシ跡中5ヶ

所を発掘し、黒色土中にて小石を発掘した。

その後、約40年間現在に至るまで特筆すべき調査事項はない。

## III

さて、チャシの機能については一般に米村喜男衛によって①戦闘用、②祭場、③談合用の3点が考えられている（米村、1960）。そして、最近ではこれに「資源観視機能としての見張台」としての機能をもたせようと考えるようになった（松田、1973）。

翻って、本チャシの機能を考えた場合、該チャシの具有する特徴は、小規模、単純構造、山及び沢がその眺望範囲、伝承がないの4点に集約される。これらの諸要件からは少なくとも戦闘を対象としたチャシの機能を考えることはできにくい。

こうした時、前記した4点中伝承を除く3点を満足させることのできる機能は、極めて日常的な内容をもったものと考えられる。すなわち、尾根の基部に掘削された二条の壙は一種の区画線と考えられ、壙間または尾根先端部側を区切る性格をもち、一種の聖域の設定の意味をもっていたと考えられ、郭内ではセレモニーが行われたに違いない。

この場合、セレモニーの対象はあくまで山であり、山の神であった。それらはエゾシカ、クマなど野生のケモノであり、神であろう。こうした山中に立地するチャシは、少なくとも十勝管内では発見されてはいないが、今後類例の発見を待って、更に追求してみたい。なお、本小文を書くにあた

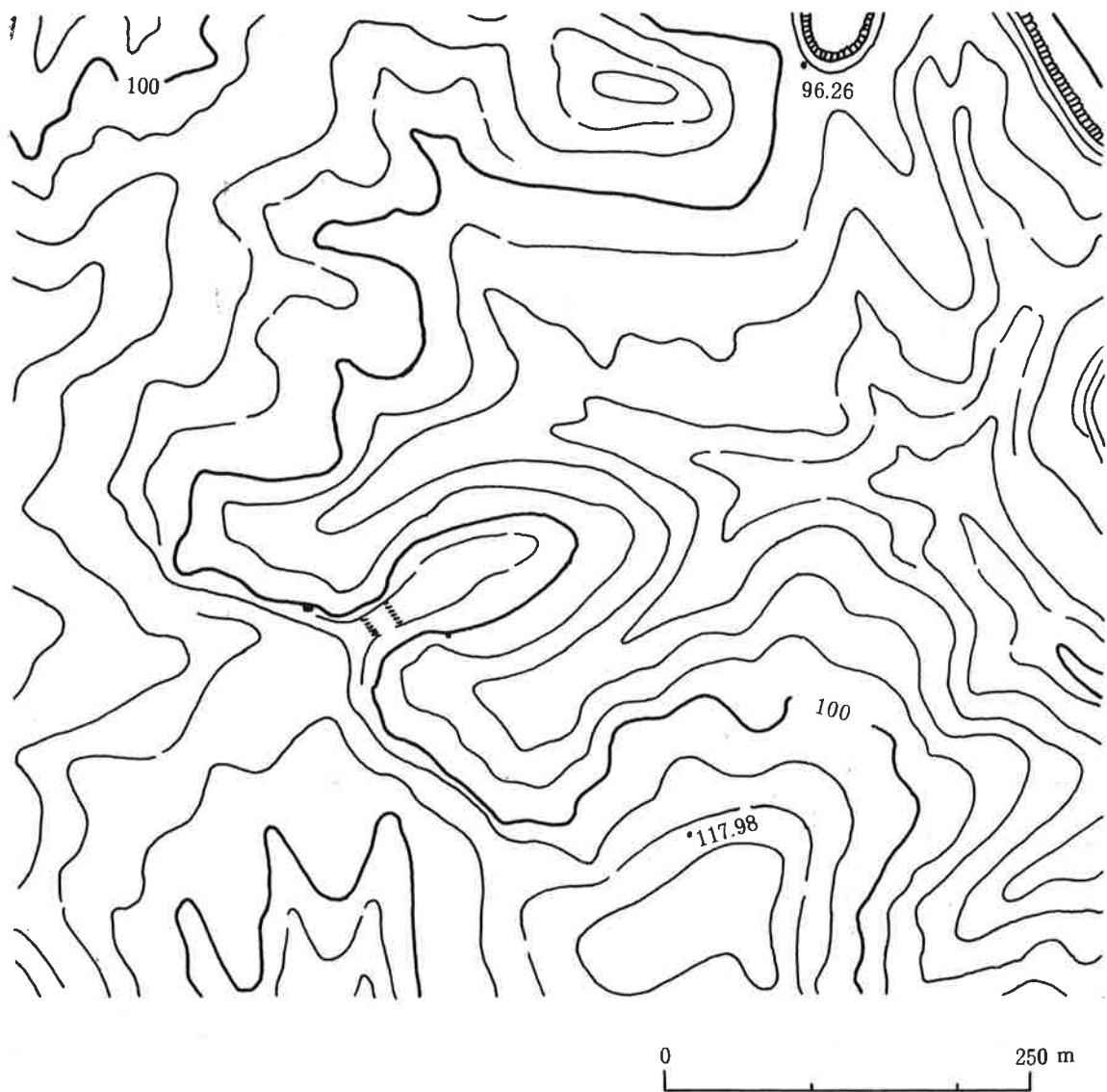


Fig. 1 霧 止 山 チ ャ シ 跡

り、沢四郎・石橋次雄の両先生には多大なご教示を受けた。記して感謝申し上げる。（\*浦幌町教育委員会学芸員、\*\*浦幌町教育委員会主事）

**註** 見張り台としての機能については、松田猛氏よりも更に古く、1960年に小林正雄氏が次のように指摘している。

「チャシは通例「城砦」として理解され、ただちに戦争と結びつけられがちだが、あながちそれのみではなかった。チャシは頭目の住居であり、一族の集会所であり、また見張台であった。それ

が非常事態の場合、はじめて城廓ないしは指揮台としての機能を發揮したものであろう。」小林正雄（1960）帯広市史、帯広市史編纂委員会

#### 引 用 文 献

- 齊藤米太郎（1935）郷土先史民族砦址、私家版
- 松田 猛（1973）釧路地方におけるチャシコツ、釧路川流域の遺跡、釧路川流域史研究会
- 米村喜男衛（1960）アイヌのチャシ（砦）、民間伝承24—4